



「駅の公共性に「佇むシカケ」をプラス、風景の価値を再構築～Agawa～」 【予告記事】

【事例キーワード】

① 技術のチカラ、②デザインのチカラ、③自然のチカラ、④コミュニティのチカラ、⑤記憶のチカラ

みなさん、初めまして！WG幹事の山田裕貴（株式会社Tetor／株式会社風景工房）です。

第1号事例が紹介されたところですが、今回の第2号事例は、山口県下関市にある阿川駅です。

当事例は、萩市内で萩ゲストハウス ruco（ルコ）等を経営する株式会社 hase の塩満さんが、自身が考える地域の拠点づくりの1つとして立ち上げたのが、阿川駅「小さなまちの kiosk」です。全国で取り壊しが行われている無人駅のリニューアルですが、今までに見たことがない駅の新しいカタチがここにはあります。

山口にいる知人に阿川駅の話聞いて興奮し、その足で見に行き、感動し、こんな新しい駅を生み出した塩満さんの話を一度聞いてみたい、その一心で今回の記事が誕生しています。塩満さんが阿川駅に込めた公共性とは？思いとは？

今回もライターは、「かわいい土木みつけ旅」でお馴染みの土木ライターの三上美絵さんです。雪降る山陰地方の中、奇跡的に晴天に恵まれた取材、どうぞご期待下さい！



阿川駅とシンボルのイチョウ、背後に続く田園風景